保険毎日新聞「みちくさ保険物語」117

保険相互会社をめぐるエピソード(10) 昭和生命

クラシック音楽のシーズンの世界基準では、9 月にはじまり、翌年の 6 月に終わることになっている。7 月と 8 月は、クラシック演奏家にとってはシーズンオフである。演奏家の中には所属する団体を離れて、夏の音楽祭など参加する者もいる。夏の音楽祭は避暑地などで行われることが多いので、演奏者もシーズン中とは異なり、いわゆる裃（かみしも）を脱いだ気楽な演奏となるのではなかろうか。

ロンドンでは、この時期にロイヤル・アルバート・ホールで、ヘンリー・ウッド・プロムナード・コンサートが行われる。「プロムス」として、広く人々に親しまれている一連のコンサートだ。このコンサートには、普段ロンドンでは聴けない、地方のオーケストラや、海外のオーケストラなどのコンサートもある。ロンドンのオーケストラ演奏家には、シーズンオフがないように思われるが、ロンドンには数多くの演奏団体があるので、演奏家には事欠かなのだと思われる。思い出すままにロンドンの演奏団体を数えてみよう。LSO（ロンドン響）、LPO（ロンドン・フィル）、フィルハーモニア、BBC 響などのシンフォニーオーケストラの他、たくさんの優れた室内管弦楽団があり、さらにコベントガーデンのオペラハウス、ENO（イングリッシュ・ナショナル・オペラ）をはじめとして、劇場やミュージカルなどの座付き管弦楽団がある。以上、記憶に頼った記述であり、現在の状況を正しく反映していないかもしれないことをお断りしておく。

わが国では、新国立劇場は、プッチーニの名作「ラ・ボエーム」（大野和士指揮、東京フィル）でシーズン終了。アンリ・ミルジェールによる「ラ・ボエーム」の原作は、光文社古典新訳文庫にあり、簡単に読める。恋愛と友情は、年老いても体験することができるかもしれないが、情熱的で無謀な発現を纏った恋愛と友情は、「青春」という人生の限られた時代にしか体験できないだろう。原作は、登場人物の回想形式となっているので、年の流れの不可逆性を強調する。だが、プッチーニは、限られた瞬間の輝きをオペラという形に凝縮することによって、私たちに何度でも「体験」させてくれる。私にとって、涙なしには見られないオペラ、それが「ラ・ボエーム」である。

連載では、昭和生命に合併することになった、相互生命保険会社 5 社を中心に解説してきたが、前回、5 社が合併してできた昭和生命について少しだけ触れた。前回の記述を受けてさらに詳しく昭和生命について検討しよう。

第一生命と千代田生命という二大相互生命、および富国徴兵保険を除く、5 社の相互会社形態を採用していた普通生命保険会社が合併した背景には、監督官庁が、一部の会社の経営破綻を回避するために促進したという事実があった。論文ではないので、ここではその論拠を示さないが、昭和恐慌が中小生保に与えた経営的打撃は大きく、また当局は、旭日生命や八千代生命などの対応（契約者保護策）にも傾注していた。5 社のうち、日本医師共済がもっとも経営状況が良く、またその基盤もしっかりしていたので、日本医師共済に他の 4 社の契約を包括移転するという方法も考えられた。しかしながら、最終的には、昭和生命相互

保険会社を新設し、5 社がそれぞれの契約を包括移転するという形で合併が行われた。

昭和生命の経営陣にはは、旧 5 社の経営陣がそのまま就任した。、そのため、かたちとしては対等合併というようにみえる。だが、昭和生命の本社が、日本医師共済の本社社屋に置かれ、また支配人は日本医師共済の岡田が就任していたように、東海生命、國光生命、蓬莱生命、および中央生命が事業を継承したという形跡は見られない。

日本医師共済は、すでに述べたように、日本医師会を中心に全国の医師会に呼び掛けて設立された会社であった。そのため基金提供者が全国に満遍なく広がって存在しており、また全国の開業医が生命保険募集において一定の寄与をしていた。日本医師共済の営業の堅固さと業績の安定は、このようなことから生まれていたのである。

以上の特徴には、陰の部分もあった。つまり普通生命保険会社として必要な組織能力を十分展開していなかったことである。普通生命保険会社として、地方の開業医というチャネル以外の募集チャネルを展開する能力、および商品開発の能力については、他社、とくに國光生命などと比較して脆弱であった。新生、昭和生命として医師以外の契約者にむけた募集チャネルを構築することが喫緊の課題であったが、それが果たされたとは思われない。また、商品開発に関しても、これまでは地方の開業医に依存してきた分、競争力のある商品の開発をするための組織への「投資」も行われなかった。これらのことは、前回に掲載した昭和生命の保険案内の記述内容から推察できる。

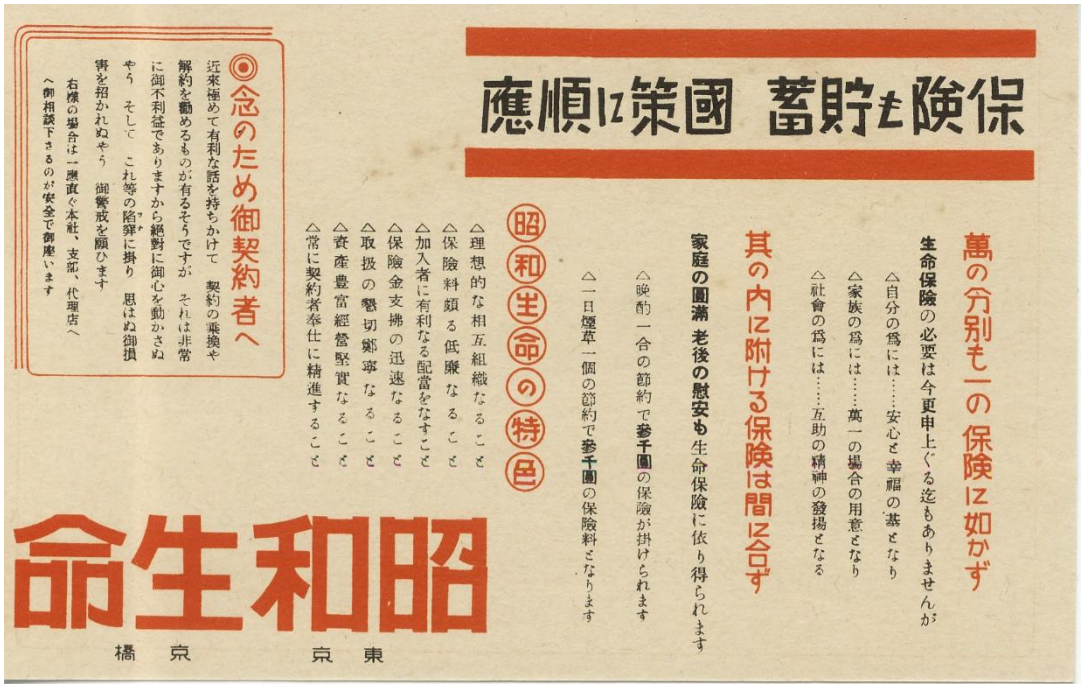
昭和生命の募集の特徴が二つある。掲載した募集史料は、いわゆる「解約ブローカー」から自社の契約を守るため宣伝文書である（画像１）。当時の保険商品は、サービスも価格も画一的なものではなかったため、比較的「割高だ」と思われた会社の契約を解約させて、他社に代えさせるという行為が後を絶たなかった。昭和初期に制定された募集取締に関する規制は、こういった紊乱した募集状況を押さえるためであったが、大きく実効性が認められなかったといわれている。この募集史料の裏面には、愛国行進曲の楽譜と歌詞が印刷されている（画像 2)。この曲は、昭和 12 年 12 月に国民歌謡として公表されているので、この史料の発行時期は、昭和 12 年末から 13 年にかけてのことだと思われる。とするとこの時期になっても昭和生命は、解約による他社への契約の流出がみられたということである。次に掲載した募集文書でも、解約の誘いに対して注意するように書かれている（画像 3)。これらの募集史料からわかることは、昭和生命の募集は、自社の商品の魅力を強調して積極果敢に打って出るようなものではなく、むしろ防衛的な性格をもっていたものだといえる。

もう一つの特徴は、国策への協力である。戦時下にあっては、戦時国債の市中消化のために、国民の貯蓄運動が展開されていた（この仕組みについては画像５の右側を参照)。なお、国民貯蓄運動の機運は、国策ということばかりでなく、解約による契約の流出を食い止めるということから、昭和生命にとっても望むべきものであった。

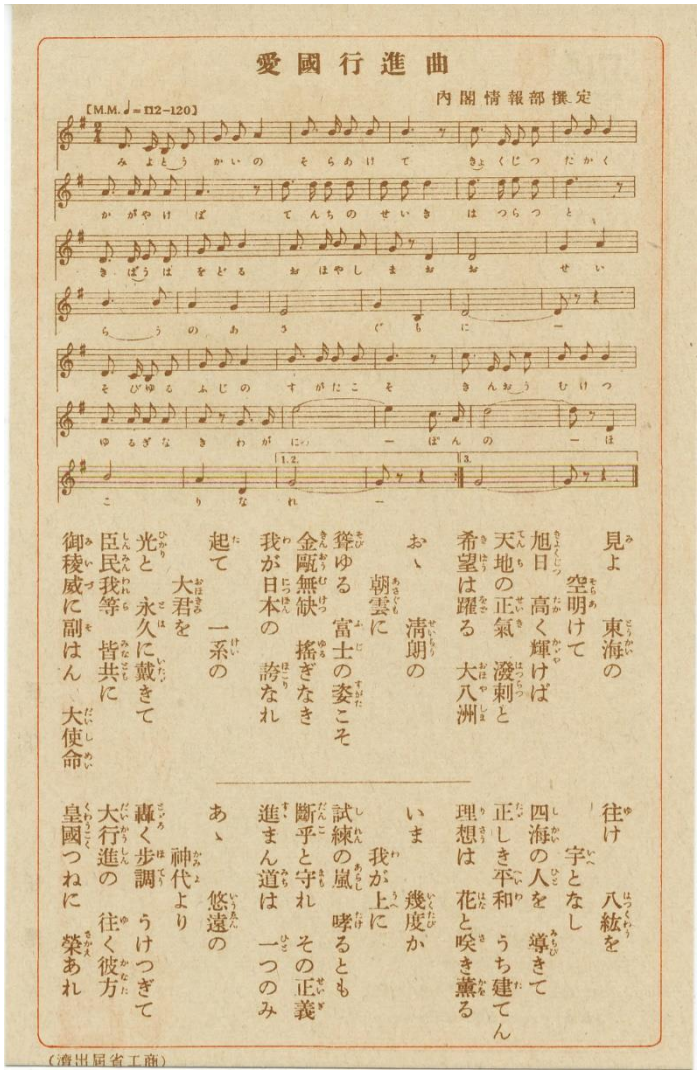
要約すれば、合併で成立した昭和生命の経営と募集において、組織能力が弱かった日本医師共済が実質的に引き継いだことが、その後の消極的かつ国策協力的な募集方針につながったのである。

ら　　、

画像１　保険解約ブローカーの勧誘に対する警告（昭和 10 年頃）



画像２　保険と貯蓄、国策に順応（昭和 12 年または 13 年）



愛國行進曲

内閣情報部撰定

〔M.M. ♩=112-120〕

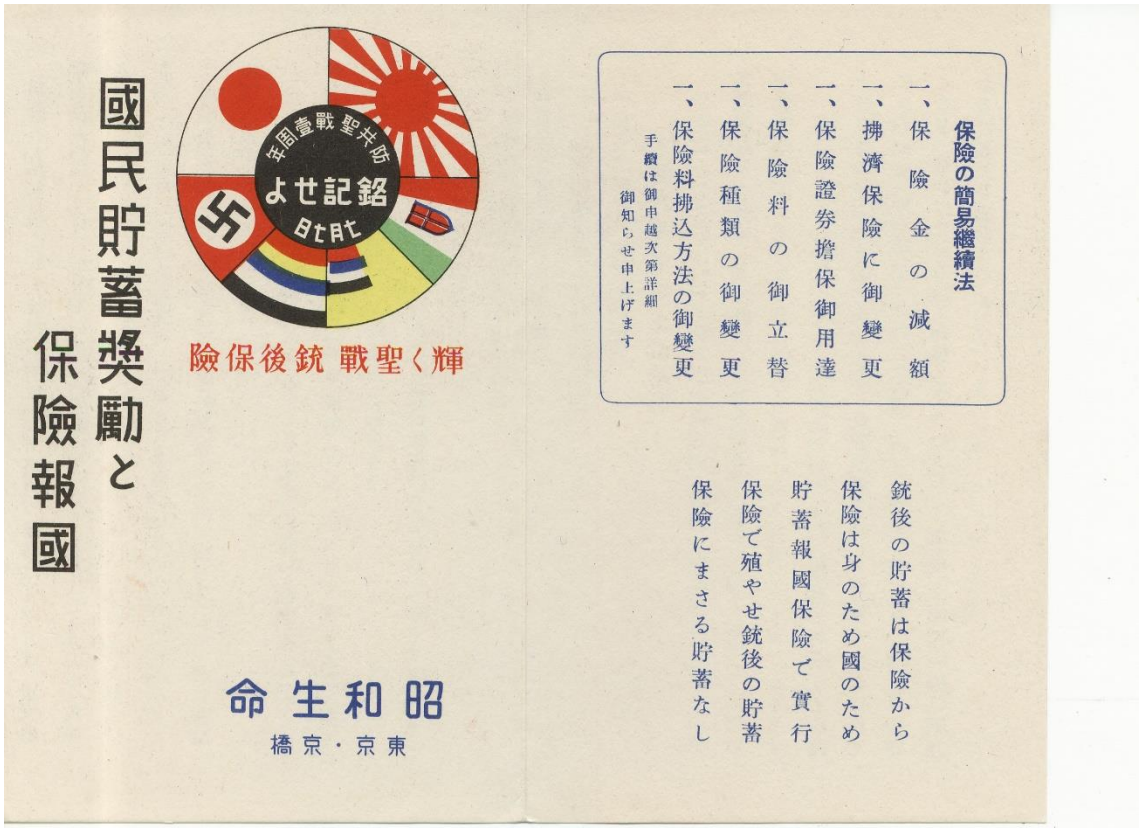
みよとうかいのそらあけてきょくじつだかく
かがやけばてんちのせいきはつらつと
きばうばをどるおはやしまおおせい
らうのあうぐもに
そびゆるふじのすがたこそきんおうむけつ
ゆるぎなきわがにっぽんのーほ
こりなれ

見よ　東海の
空明けて
旭日　高く輝けば
天地の正氣　潑剌と
希望は躍る　大八洲
おゝ　清朗の
朝雲に
聳ゆる　富士の姿こそ
金甌無缺　揺ぎなき
我が日本の　誇なれ
起て　一系の
大君を
光と　永久に戴きて
臣民我等　皆共に
御稜威に副はん　大使命

往け　八紘を
一宇となし
四海の人を　導きて
正しき平和　うち建てん
理想は　花と咲き薫る
いま　幾度か
我が上に
試練の嵐　哮るとも
斷乎と守れ　その正義
進まん道は　一つのみ
あゝ　悠遠の
神代より
轟く歩調　うけつぎて
大行進の　往く彼方
皇國つねに　榮あれ

（濱出屋省工商）

画像３　国民歌謡として作られた「愛国行進曲」の楽譜と歌詞が記載（画像２の裏面）



画像 4　国民貯蓄奨励と保険報国（昭和 10 年代後半）

画像５　百億円貯蓄の王道　昭和 14 年頃